

現代ロシア語動詞の語彙的意味とアスペクト

柳 沢 民 雄

序 論

本稿の目的は、現代ロシア語の動詞の語彙的意味とアスペクトの関係を考察することである。ロシア語における不完了体 (несовершенный вид, imperfective aspect) と完了体 (совершенный вид, perfective aspect) は、文脈においてさまざまな体(вид)の意味のニュアンスを与える¹⁾。この意味のニュアンスは、かならずしも全ての動詞において一様に現れるわけではなく、動詞の語彙的な意味に規制される。例えば、不完了体の機能の一つは、動作のプロセスを表すことであるという：Когда я выходилⁱ из дому, я встретил^p знакомого.²⁾ 《私は家から出るとき知り合いに出会った》。しかし、*Когда я приходилⁱ сюда, я встретил знакомого.³⁾ 《私はここに来るとき知り合いに出会った》、とか *Он долго находитⁱ свои часы. 《彼は長い間自分の時計をさがしている》とは言えない。動詞 приходить, находить は決して動作のプロセスを表すことができないからである。この意味ではプロセスを表すことが出来る別の不完了体動詞、例えば、идти, подходить; искать を使わなければならない。また、я встречалⁱ друга, но не встретил^p 《私は友人に会おうとしたが、会えなかった》; я ловилⁱ друга, но не поймал^p 《私は友人を捕まえようとしたが、捕まえられなかった》の文における、不完了体 встречал, ловил による動作実現に向けての試み・傾向と、完了体 встретил, поймал による動作の実現・成功を表す意味の対立 (l'opposition de l'action tentée à l'action réalisée, Mazon: 104) は、видел/увидел⁴⁾ 《会う、見る》という動詞の対立によっては表すことができない：*я виделⁱ друга, но не увидел^p。過去時制における видел/увидел の体の対立において、文脈に現れるこの体の相関する意味の対立は、継続/瞬間の意味の対立であるからである：все виделⁱ, а главного не увидел^p 《全てを見たが、肝心なことは見なかった》(Маслов, 1984:62)。この際に注意しなくてはならないことは、ловил / поймал タイプの動詞の意味が常に上で述べた意味を表しているとは見なしてはならないことである。不完了体 ловил は、他の文脈においては動作の実現・成功をも表すことが出来るのである：

- (1) Мы, всё равно как крестьянские дети, дни и ночи проводили в поле, в лесу, стерегли лошадей, драли лыко, ловилиⁱ рыбу и прочее тому подобное... (Чехов: Крыжовник)

《私たちは百姓の子供たちと同じように、昼も夜も野原や森の中で過ごし、馬の番をしたり、

木の皮を剥いたり、魚を捕ったり、そんなことをやっていました》

(2) Собака *ловила*¹ на лету кусочки мяса, которые я ей бросал. (Маслов)

《犬は私が投げた肉の塊りをすばやく捕まえた》

(1)の文における不完了体は反復を、(2)の文では一般的事実を表しており、この文脈の中で ловил は「魚(肉片)を捕ろうとしていて捕れなかった」のではなくて、実際に「魚(肉片)を捕った」のである。すなわち、この不完了体の用法は、欠如的対立⁵⁾をなすロシア語動詞のアスペクトの「限界到達」特徴(以下の2章参照)に関しての無標(unmarked)の項として説明することができる。そこでロシア語動詞の語彙的意味とアスペクトの関係を考察するさいには、上で述べたような動作実現へ向けての試み・傾向対動作の実現・成功といった基準だけによって動詞を分類しただけでは不十分である⁶⁾。本稿では動詞によって示される動作を、アスペクト的意味の対立(1章参照)の観点から分類することによって、動詞の語彙的意味とアスペクトの関係を考察するものである。

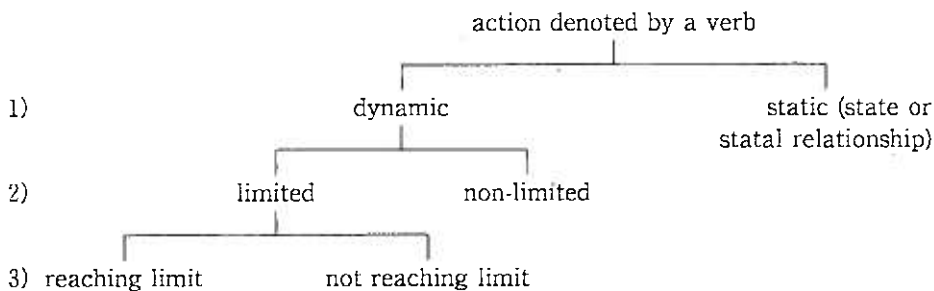
1. アスペクト的意味について

ロシア語のアスペクトと語彙的意味を考察するにあたり、一般的なアスペクト的意味を概観することにする。Маслов (1985:6-18)によれば、アスペクト的意味は文法的な表現手段としてのアスペクトばかりでなく、語彙的および語彙-文法的形としてのアスペクト性(аспектуальность, aspectuality)の機能的-意味論的分野を考慮に入れる必要があり、この分野でアスペクト的意味の様々なタイプを区別するにあたり、最も重要な区別は質的アスペクト性(qualitative aspectuality)と量的アスペクト性(quantitative aspectuality)⁷⁾の区別であるという。本論が動詞の語彙的意味とアスペクトの関係を考察するのであるから、ここでは質的アスペクト性を概観することにする。Масловによれば質的アスペクト性は、以下のような意味論的な対立を含む:

- 1) dynamic: static, i.e. action proper: state or statal relationship;
- 2) limited action, directed towards an inner limit: non-limited action, not directed towards a limit.⁸⁾
- 3) limited action which reaches its limit: action directed towards a limit, but seen in the phase when the limit has not yet been reached.

ロシア語における1)の対立は、動的動詞(вставить《立ち上がる》, надевать галонши《オーバーシューズをつける》)と静的動詞(стоять《立っている》, быть в галоншах《オーバーシューズをつけている》)によって示される動詞の語彙的な対立である。2)の対立は、動的動作内での限界

動作(limited action)と非限界動作(non-limited action)の対立である。限界動作とは、ある内的な限界、すなわちある特別な限界目標を含意した動作である(идти сюда《こちらに来る》, курить сигарету《一本のシガレットを吸う》, читать письмо《手紙を読む》)。これに対して非限界動作とは、内的な限界、すなわちある特別な限界目標を含意しない動作である(гулять《散歩する》, ходить по комнате《部屋の中を歩き回る》⁹⁾あるいはидти быстро《急いで歩く》, курить《煙草を吸う》あるいはкурить трубку《パイプを吸う》, читать《読書する》)。ロシア語における2)の対立は、一般に動詞の語彙的な対立によって示されるが、しかし上のидти, курить, читатьのように必ずしも語彙的な対立によっては示されない。3)の対立は、限界動作内での限界到達(reaching limit)と限界非到達(not reaching limit)の動作の対立である。限界到達の動作とは、内的な限界、すなわちある特別な目標への到達を示す動作である(прийти^p сюда《ここにやって来る》, поймать^p рыбу《魚を捕まえる》, выкурить^p сигарету《(一本の)シガレットを吸い尽くす》)。一方、限界非到達の動作とは、限界目標を含意しつつもその目標に到達しない動作である(идтиⁱ сюда《こちらにやって来る(やって来つつある)》, ловитьⁱ рыбу《魚を捕まえようとする》, куритьⁱ сигарету《(一本の)シガレットを吸う》)。ロシア語における3)の対立は、アスペクトの対立によって示されるのであり、限界到達の特徴にたいして、有標として働くのは限界動作を示す動詞の完了体であり、不完了体はこの特徴にたいして無標として働く。これら三つの意味論的対立は、以下のような階層性を成す：



さらに上のアスペクト的意味の対立とロシア語動詞との関係は、以下の関係を示す：1)の対立を示す動詞、つまり動的動詞(dynamic verb)と静的動詞(static verb)の対立に関して特徴的なことは、静的動詞は必ず不完了体のみしか持ちえない動詞、すなわち体(вид)のペアを成しえない不完了体動詞(imperfectiva tantum)のみである⁹⁾。それに対して動作動詞は、imperfectiva tantumという特徴に関しては無標である。2)の対立、すなわち限界動作(limited action)を示す動詞と非限界動作(non-limited action)を示す動詞の対立に関しては、後者は必ず imperfectiva tantumとして現れ、前者は体のペアを成すことができる動詞が完了体のみしかない動詞、すなわち体のペアを成しえない完了体動詞(perfectiva tantum)として現れる。3)の対

立、すなわち限界到達を示す動作と限界動作を含意するが限界非到達を示す動作の対立を示す動詞は、必ず体のペアをなす動詞であり、その対立は完了体と不完了体の対立として現れる。従って、ロシア語動詞の語彙の意味とアスペクトの関係の本質的な問題は、どの様に動詞の意味が限界動作を示すことができるかを分析することにあるといえる。以下でアスペクト的意味の観点から、個々のロシア語動詞を考察する。

2. 体のペア性の基準

ロシア語動詞は、相関する体(вид)のペア(不完了体と完了体の対)を持ちうるか持ちえないかによって、二つに区分される。さらに体のペアを持ちえない動詞は、不完了体だけしか持ちえない動詞(imperfectiva tantum)と完了体だけしか持ちえない動詞(perfectiva tantum)に二分される¹⁰⁾。動詞が体のペアを成すかどうかを決定する方法は、形態論的な方法によるのではなく、意味論的方法によって解決されねばならない。例えば、Шахматов¹¹⁾は、形態的立場から любить《愛する》と полюбить《好きになる》は、接頭辞 по- による完了化として体のペアと見なしていた(Маслов: 1948による)。しかし Маслов による体のペアを検証する客観的基準によれば、これは体のペアを成すとみなすことはできない。彼によれば、「Шахматовの形態論的基準を投げ捨て、意味論的基礎の上にペアになる動詞とペアにならない動詞の区別の問題をたて、それをペアになる動詞とペアにならない動詞の意味の区別についての問題に変えようと試みる

とき、我々はもし問題があちこちの研究者たちの主観的な好みに従ってその場その場に依じて解決されることを望まないならば、この区別のために何らかの他の客観的な基準を見つけなくてはならない。この客観的な基準を公式化するためには、体の対立がそれらのうちの一つのために『自動的に』取り外される、つまり体のうちの一つが必ず他の体にとって変わるような状況を言語の中で見つけなくてはならない。現代ロシア語においてそのような状況は存在する。それはいわゆる歴史的現在(praesens historicum)である。過去時制の観点から歴史的現在の観点への語りの移行のさい、完了体も不完了体も全ての動詞は、現在時制の不完了体の形で均一化される。明らかに動詞の語彙の意味はこの際、原理的にどのような最小の変化も受けるはずはない。つまり、歴史的現在の観点への語りの移行のさいの、ある完了体動詞の何らかの不完了体動詞への可逆性は、これら二つの動詞の実際のペア性の信頼できるしるしであるのに対し、非可逆性はその二つの動詞が体のペアを成していないということのしるしである。例えば、Он *полюбил*^P ее с первого взгляда 《彼は一目で彼女を好きになってしまった》という文は、歴史的現在における語りなおしのさいには、おそらく *Он *любит*^I ее с первого взгляда には変わらない、従って、любить と полюбить はペアではない。反対に、もし Она *очнулась*^P в незнакомой комнате 《彼女は見知らぬ部屋で意識を取り戻した》が、歴史的現在への移行のさいに、Она *приходит*^I в чувство в незнакомой комнате (若干の、この場合には避けられない、情緒的

ニュアンスを失うが)を与えることができるならば、このことは動詞 очнуться の形態論的な不十分さは、語源的に『よその』動詞の(より正確には、全語結合の)導入によって、つまり言語学で『補充的』配列と呼ばれるところの創造によって克服される、ということの意味する」(Маслов: 1984: 53)。すなわち、любить と полюбить の場合、後者は起動的な接頭辞 по- によって любить の意味を変容させており、体のペアとは見なすことはできない。しかし、同じ起動的な接頭辞 за- をもつ完了体 засмеяться^P《笑いだす》の場合には、полюбить の場合とは異なる。Forsyth (41-42)によれば、以下のように смеяться^I と засмеяться^P は、ある文脈のなかで体のペアを形成する:

(3) Он прочитал^P письмо, засмеялся^P и отдал^P его Вале.

(4) Он читает^I письмо, смеется^I и отдает^I его Вале.

'He read the letter, laughed, and gave it to Valya.'

この文脈の中では、засмеялся は起動的意味を失っており、単なる「笑った」の意味であるという。すなわち、完了体の特徴である動作の「全一的把握(целостный охват)」¹²⁾の意味が全面に現れてくる場合、体のペアをもつことができるのである。しかし、Прослушав анекдот, он засмеялся^P и не мог перестать. (Forsyth)《アネクドートを聞いてから、彼は笑いだして、笑うのを止めることができなかった》という文では、засмеялся は起動的意味をもち、体のペアをもつことはできない。また普通、体のペアを成さないとされる起動相の動詞 пойти^P《出かける》もまた、ある文脈では идти^I《行く》と体のペアを形成する。この場合、必ずこれらの動詞は運動の目的地を取らねばならない:

(5) Он пошел^P в библиотеку за книгой. 《彼は図書館に本を借りに行った》

(6) В без четверти десять нужно идти^I к моим милым мальчикам читать лекцию. Одеваюсь и иду^I по дороге, которая знакома мне уже тридцать лет и имеет для меня свою историю. (Чухов: Скучная история)

《10時15分前に、私は講義するために我が愛する子供たちの所へ行かなくてはならない。身支度して、もう30年も通い慣れた、私には思い出ある道を歩いていく》

(5) の文では、пошел は動作の始まりだけでなく、動作全体、つまり出かけてから図書館に到着するまでの全体を表している(Forsyth: 328)。(6) の文では、最初の идти は пойти と体のペアを成すが、第二番目の иду は相関する体のペアを持たない imperfectiva tantum である。これと似た相関性を呈するのは、писать^I《書く》、петь^I《歌う》、читать^I《読む》、шить^I《縫う》等の動詞である。これらの動詞は、恒常的なことに従事すること、つまり職業や仕事の種類等

を表す場合には、相関する体のペアを持たない。つまり imperfectiva tantum である: он пишет 《彼は文筆活動にたずさわっている》, он поет 《彼は歌手である》, он читает 《彼は読書している; 教鞭をとっている》。この場合、ふつう補語をとらないが、とる場合もある: он пишет мужские вещи (=он мужской портной) 《彼は紳士服の仕立屋だ》。しかし、これらの動詞が相関する体のペアを成す場合、必ず補語をとる: он читалⁱ эту книгу 《彼はこの本を読んだことがある(読んでいた, 読んだ, 等)》; он прочитал^p эту книгу 《彼はこの本を読んだ(読んでしまった)》。すなわち、相関する体のペアをもつ場合には、動作はある限界(上の例では「本を読み終える」という限界)を含意しており、完了体はこの限界に到達すること(つまり、「この本を読み終えた」ということ)を意味し、他方、不完了体はこの限界に到達するということを積極的(positive)には表さない。つまり、動作の限界に到達したとも、到達しなかったともいえることを意味している。また、普通、辞書では imperfectiva tantum とのみ記述されている動詞 куритьⁱ 《喫煙する》は、ある場合には相関する体のペアを形成すると考えられる。この動詞が imperfectiva tantum となる条件は、その動詞によって示される動作が非限界的である場合である。例えば, куритьⁱ трубку 《パイプを吸う》, куритьⁱ много 《たくさん吸う(ヘビースモーカーだ)》。しかし、動詞によって示される動作が限界を含意している場合には、相関する体のペアを形成する: курить/выкурить сигарету 《(一本の)シガレットを吸う》。ここにおいても上の читать の場合と同様に、完了体は限界到達を、不完了体は限界到達を積極的に表さない。上で考察された動作の限界を含意する一部の動詞は、さらに完了体から二次的に派生された不完了体をつくることができる: читатьⁱ – прочитать^p – прочитыватьⁱ; куритьⁱ – выкурить^p – выкуриватьⁱ。二次的な不完了体は、各々の個々の動作の限界到達が繰り返されることを意味する: Он каждый день прочитывалⁱ это письмо. 《彼は毎日、この手紙を(終わりまで)読んでいた》。

3. 体の分類

上で検討された動詞は、相関する体のペアに関して、ある場合には imperfectiva tantum として、他の場合には体のペアを形成する動詞であった。基本的にこれらの動詞がどちらの部類に属するかを決定しているのは、文脈である。しかし、ロシア語の動詞がどの部類に属するのかは、大部分の場合、文脈とは無関係に語彙的意味によって決定される。これは基本的に三つの部類に分類できる:

- 1) imperfectiva tantum (体のペアを成さない不完了体)
- 2) perfectiva tantum (体のペアを成さない完了体)
- 3) 相関する体のペアをなす動詞

3. 1. imperfectiva tantum

この部類に属する動詞は、さらに二つに下位分類することができる。すなわち、静的動詞(static verb)、つまり状態(state)あるいは状態的關係(statal relationship)を表す動詞グループと、動的動詞(dynamic verb)の中の非限界的動作(non-limited action)を表す動詞グループである。ここで述べる imperfectiva tantum に属するロシア語の状態を示す動詞は、時間的な見通しのない、つまり時間的に画定されず、どの局面においても何らの状態を変化させるような質的变化を含まないことを特徴とする動詞である: стоять 《立っている》, лежать 《横たわっている》, сидеть 《坐っている》, спать 《眠っている》, молчать 《黙っている》, 等。例: он стоялⁱ у окна час 《彼は窓辺に1時間立っていた》。このグループの動詞からは、時間的に画定される時、すなわち継続する局面のまるごとの姿を表すときには、ペアを成さない完了体が形成される:

(7) Он простоял^p час на платформе. 《彼はプラットフォームに1時間立ち通した》

(8) Он постоял^p у ворот несколько минут и пошел домой.

《彼は門の所に数分立ちどまっていたが、やがて家に帰っていった》

状態的關係を示す動詞とは、時間的に画定されない主語の存在や主語の他のものとの質的、量的な關係を示す動詞(быть 《ある》, существовать 《存在する》, присутствовать 《出席する》, отсутствовать 《欠席する》, жить 《住む》, состоять 《から成る》, означать 《意味する》, значить 《意味する》, иметь 《持つ》, принадлежать 《に依存する》, стоить 《(値段が)する》, весить 《だけの重さをもつ》, 等), および主語の職業を示す動詞(рыбачить 《魚捕りを職にする》, сапожничать 《靴屋を職にする》, писать 《文筆活動をする》, петь 《歌い手である》, плотничать 《大工稼業をする》, 等), また瞬間的でない主語の感覚や意識, 情緒の状態, 肉体的状態を示す動詞(любить 《愛する》, презирать 《軽蔑する》, ненавидеть 《憎む; 嫌う》, уважать 《尊敬する》, ревновать 《嫉妬する》, гордиться 《誇りに感ずる》, болеть 《痛む; 病む》, бояться 《恐れる》, 等)である。このグループの動詞の一部からは、時間的に画定される時、ペアを成さない完了体が形成される:

(9) Римская империя просуществовала^p пятьсот лет.

《ローマ帝国は500年間存在した》

(10) Он прожил^p всю жизнь в деревне. 《彼は一生を田舎で暮らした》

動的動詞の中の非限界的動作(non-limited action)を示す動詞とは、どのような動作の限界も含意することなく、言い換えれば動作の終結の瞬間を目的として指し示すことなく、動作のプロ

セスを示す動詞である。この動詞の典型的なものは、ロシア語動詞の運動の動詞のカテゴリーの中の不定体動詞(ходить《歩く》, ездить《(乗り物で)行く》, носить《持ち運ぶ》, 等): он ходит по комнате《彼は部屋の中を歩き回っている》, および運動の目的地を示さない定体動詞(идти《歩いて行く》, ехать《(乗り物で)行く》, нести《運ぶ》, 等): он идет медленно《彼はゆっくりと歩いていく》である。もし定体動詞が運動の目的地を示す場合には、上で述べたように接頭辞 по- による完了形は起動的意味を失い、それぞれは相関する体のペアを形成する: шелⁱ/пошел^p на работу《仕事に行った》, ехалⁱ/поехал^p в Москву《モスクワへ行った》, несⁱ/понес^p письмо на почту《手紙を郵便局へ持っていった》等。また運動に関連する非限界動詞 гулять《散歩する》, бродить《ぶらつく》, течь《流れる》等が含まれる。これ以外の動作の限界を含意しない一般動詞としては、плакать《泣く》, разговаривать《語り合う》, дразнить《からかう》, ухаживать《世話をする》, работать《働く》, танцевать《踊る》, ласкать《愛撫する》, приятельствовать《親交を結ぶ》, лить《注ぐ》等がある。また非限界動詞以外に、目標到達を含意するが、いかなる文脈においても決してその目標に到達することのない動詞, искать《探す》, ждать《待つ》が imperfectiva tantum に含まれる(これに関しては後の ловить タイプの動詞との違いを参照)。

上で述べた imperfectiva tantum に共通の性質として考えられることは、いずれもその動詞そのものによって示される動作あるいは状態は、時間的に無限の展望をもち、中断や質的な変化をこうむることがなく、全ての局面において同じである。つまり「瞬間化の不可能性とプロセスの内的な無限性」(Маслов: 1984: 56)によって、これらの動詞は特徴づけられる。この特徴は静的動詞と非限界動作を示す動的動詞、および一部の絶対的に限界非到達を示す動詞によって表される。

3.2. perfectiva tantum

この部類に属する動詞は、瞬間相を示す動詞(грянуть《突然轟く》, ринуться《突進する》, хлынуть《(液体が)ほとばしる》, рухнуть《(音を立てて)倒れる》, очнуться《正気を取り戻す》, сгннуть《消え失せる》, 等), 終止相を示す動詞(отобсдать《昼食を終わる》, отшуметь《鳴りやむ》, 等), また起動相を示す動詞(полюбить《好きになる》, заплакать《泣きだす》, залаять《吠え始める》, заиграть《遊び始める》, 等), および運動の動詞に接頭辞 по- を付加して形成された起動相の意味の пойти《歩き始める》タイプの動詞(он пошел за ней《彼は彼女の後から歩きだした》)である。さらにこの部類には、時間的に画定された、すなわち継続時間をひとまとまりの姿として把握することを意味する、状態動詞から派生される動詞が含まれる: прожить《(ある期間)暮らす》, пробыть《(ある期間)滞在する》, постоять《しばらく立っている》, пожить《しばらく暮らす》, просуществовать《(ある期間)存在する》等,(註9)参照)。これらの perfectiva tantum の動詞に特徴的なことは、プロセスを表すことができないことであり、このことは imperfectiva tantum の動詞と対立する大きな違いである。さらに perfectiva tantum の動詞は、

不完了体をもたない動詞であるので、不完了体の用法の一つである反復的動作の意味や歴史的現在を表現するためには、様々な方法が使われる。例えば、不定の反復を表すためには、*бывало* を用いた迂言的方法が用いられる。例えば、*очнуться* 《正気を取り戻す》にたいしては、*бывало очнется* を用いた表現が用いられる。また *то... то...* による表現を参照：*Как изменчива нынче погода, -то вдруг хлынет^P дождь, то снова выглянет^P солнце.* 《今日はなんて変わりやすい天気だ、突然に雨が降りだしたり、また太陽が顔を出したり》(Маслов: 1984: 58)。歴史的現在を表現するためには、別の語からなる表現による。例えば、*очнуться* にたいしては、*приходит в чувство* が用いられる(2章参照)。以上のような意味的な特徴から、この部類に属する動詞はアスペクト対立を欠いた欠如動詞であり、それはアスペクトの範疇としてではなく、所謂、動作様式(Aktionsart, способ действия)の範疇¹³⁾に含めるべきであると考えられる。

3.3. 相関する体のペアをなす動詞

ロシア語動詞の大部分はこのカテゴリーに含まれ、実際の体の用法とはこのカテゴリーの用法でもある。この部類に属する動詞は、動詞動詞(dynamic verb)の限界動作(limited action)を示す動詞である。すなわち動作の目的あるいは目標がどちらの体においても含意されている。一般にこの部類の動詞の体の対立は、次のように言える：完了体の機能は限界到達であり、他方、不完了体の機能は限界到達に関しては、どちらともいえない無標項を成している。この不完了体の用法を決定するのは、文脈と質的アスペクト性において見られる動詞の語彙的意味である。質的アスペクト性において見られる語彙的意味に従って、相関する体のペアをなす動詞は基本的に不完了体が動作のプロセスを表すことができないか、できるかによって二つに分類することができる：A) 不完了体が一回の限界到達への過程におけるプロセスを表すことができない動詞、例えば：*приходить/прийти* 《やって来る》；*качать/качнуть* 《揺り動かす》。プロセスを表すことができない動詞は、さらに以下のように下位区分することができる。A-1) 一回の動作において限界到達の目標が一点であり、両方の体は限界到達のみを示す動詞：*приходить/прийти*。A-2) 完了体は一回動作の限界到達を示すが、不完了体は限界到達の動作の回数に関して無標項を成している動詞：*качать/качнуть*。B) プロセスを表すことができる動詞、例えば：*ловить/поймать* 《捕まえる》；*читать/прочитать* 《読む》；*видеть/увидеть* 《見る》。プロセスを表すことができる動詞は、さらに以下のように三つに下位分類することができる。B-1) 完了体は限界到達を表すが、不完了体は限界到達に関して無標項であり、限界到達への段階的到達を示さない動詞：*ловить/поймать*。B-2) 完了体は限界到達を表すことができ、不完了体は限界到達に関して無標項であり、限界到達への段階的到達を示す動詞：*читать/прочитать*。B-3) 完了体も不完了体も限界(目標)到達を示すことができ、不完了体と完了体が「持続性」対「瞬間性」の対立を一般的に示す動詞：*видеть/увидеть*。

3.3.1. A-1) *приходить/прийти* 型

このタイプの動詞は、運動の動詞に接頭辞 *при-* を付加した動詞、例えば、*приносить/принести* 《運んでくる》、*приезжать/приехать* 《(乗り物で) やって来る》等。および、*находить/найти* 《見つける》、*случаться/случиться* 《起きる》、*терять/потерять* 《失う》、*включать/включить* 《スイッチを入れる》、*выключать/выключить* 《スイッチを切る》、*выучивать/выучить* 《暗記する》、*вызубривать/вызубрить* 《棒暗記する》、*заговаривать/заговорить* 《話し始める》等である。この型の動詞は、どちらの体も限界動作の到達のみを示し、不完了体によって目標への実現へ向けてのプロセスを表すことはできない。従って以下のプロセスを表す日本語の文は、この型の動詞では表現できない：

- (11) * *Смотри, вот он приходитⁱ сюда.*
《ほら、彼がこちらにやって来るぞ》
- (12) * *Смотри, почтальон приноситⁱ мне письмо.*
《ほら、郵便屋さんが僕に手紙を持ってくるぞ》
- (13) * *Он смотрел на Сашу, не понимая, что вообще случаетсяⁱ.*
《彼はいったい何が起こっているのかわからずに、サーシャを眺めていた》
- (14) * *Он долго находилⁱ свои часы.*
《彼は長い間自分の時計を見つけていた》
- (15) * *Смотри, вот он сидит за столом и вызубриваетⁱ урок. (Маслов)*
《ほら、彼は机にすわって、宿題を棒暗記しているぞ》

日本語の意味を表すためには、他のプロセスを表すことのできる動詞、例えば、*идти* (подходить), *нести*, *происходить*, *искать*, *зубрить* 等を用いなくてはならない。*приходить/прийти* 型の動詞がプロセスを表すことができないのは、動作の実現の目標点への到達の意味が動作の経過の意味を駆逐しているからと考えられる。従って、不完了体の現在形や過去形は、プロセス以外の不完了体の意味、すなわち反復、習慣、予定、一般的事実等の意味を表す¹⁴⁾：

- (16) *Обыкновенно, когда по утрам она приходилаⁱ ко мне здороваться, я сажал ее к себе на колени и, целуя ее пальчики, приговаривал...* (Чехов: Скудная история)
《毎朝、彼女が挨拶をしに私の所にくると、私はたいてい彼女を自分の膝の上に抱き上げて、指に接吻しながら言ったものだ》(反復)
- (17) *Поезд приходитⁱ в семь часов утра.*
《列車は朝の7時に到着することになっている》(予定)
- (18) *Ко мне приходилаⁱ Анна? 《私のところにアンナが来ましたか》* (一般的事実)

さらにこの型に属する動詞の多くに特徴的なことは、その動詞によって示された動作とは逆の動作をもつ動詞をロシア語の語彙項目の中にもつことである。例えば、приходить/прийти《やって来る》-уходить/уйти《行ってしまふ》, приносить/принести《持ってくる》-уносить/унести《持ち去る》, включать/включить《スイッチを入れる》-выключать/выключить《スイッチを切る》, находить/найти《見つけ出す》-терять/потерять《失う》等。このような意味特徴をもつ動詞にとって特徴的なことは、不完了体の過去形は逆の動作の意味をも含意することである: он приходилⁱ=он пришел^p+ушел^p《彼はやって来て、帰っていった》, он приносилⁱ=он принес^p+унес^p《彼は持ってきて、持って行った》, он включалⁱ=он включил^p+выключил^p《彼はスイッチを入れて、切った》等。所謂, 'two-way' action (Forsyth: 78-81)のニュアンスを持つ。一方、完了体の過去形は、そのような逆の動作の意味を含意することはなく、限界動作の目標への到達だけが示される。すなわち、孤立した表現において、不完了体は発話の時点とは切り離された動作を示すのに対して、完了体は目標に到達された動作が発話の時点において残存していること(所謂、ペルフェクト的意味 *перфектное значение*)を示す。例えば:

(19-a) Здравствуй! Вот я и пришел^p! (Василенко)

《今日は! 僕がやって来たよ!》

b) В комнате никого нет, а на столе – цветы. Кто же приходилⁱ сюда без меня? (ibid.)

《部屋には誰もいないが、机の上には花がある。いったい誰が私の留守にここに来ていたのだろうか》

(20-a) Я слышу музыку: это мой сын включил^p радио. (ibid.)

《音楽が聞こえる: 私の息子がラジオをつけた(つけている)のだ》

b) Почему утюг горячий? Кто его включалⁱ? (ibid.)

《何故アイロンが熱いんだ。誰がアイロンをつけていたんだ》

上の a) の例文は、動作の結果が発話時点にまだ残っていることを示しているのに対して、b) の例文は、動作の結果が発話時点には既に消滅していることを示している。このような意味特徴を有する動詞は、後述する B-1 型動詞においても見られる。

3.3.2. A-2) качать/качнуть 型

この型に属する動詞は、махать/махнуть《(手などを)振る》, стучать/стукнуть《ノックする》, качаться/качнуться《揺れる》, ударять/ударить《打つ》, колоть/кольнуть《ちくちく刺す》, топтать/топнуть《どしんと踏む》等である。この型の動詞の不完了体は、個々の一回動作におけるその限界到達へのプロセスを表すことができない。従って、不完了体は何回かにわたって繰り返される同種の行為(multiphasal action)を表したり: Мать долго качалаⁱ ребенка, чтобы он быстрее

заснул. (Сазонова) 《母親は赤ちゃんが出来るだけ早く寝入るようにと長い間揺すっていた》,あるいは一般的事実等を表す: Как ударять¹ лошадь хлыстом? 《どうやって馬に鞭をあてるんだい》。他方,完了体は一回動作 (semelfactive action) の限界到達を表す: Всадник ударил² лошадь хлыстом. 《騎手は馬に鞭を一振りした》。

この型の動詞の不完了体(特に,完了体が接尾辞 -ну- を有するもののペア)は,普通, multi-phasal action を表すことが基本的な意味であり,その意味では A-1) のような動作のプロセスを表すことが不可能なカテゴリーの中に組み入れることには無理がある。Forsyth は,この型の動詞群を認めずに,一部の不完了体(例えば, качать (ся)) を imperfectiva tantum のカテゴリーの中に組み入れている (Forsyth: 56)。Маслов のアスペクトのペアの基準に従うならば, A-2) 型は確かにアスペクトのペアを形成する。しかし実際的な見地からすれば, Forsyth のようにこれらはアスペクトのペアを形成しない imperfectiva tantum と perfectiva tantum とみなし,アスペクト以外の意味的な組み合わせとして考えたほうが良いように思える。というのもこの型の動詞のアスペクト対立は,以下で述べる B 型動詞が関わる質的アスペクト性ではなく,量的アスペクト性のアスペクト的意味の対立に属しているからである。このような意味的な組み合わせとして, кричать/крикнуть 《叫ぶ》, прыгать/прыгнуть 《飛び跳ねる》, кашлять/кашлянуть 《咳をする》, свистеть/свистнуть 《口笛を吹く》, толкать/толкнуть 《突く, 押す》等が考えられる。

3.3.3. B-1) ловить/поймать 型

この型に属する動詞は, брать/взять 《取る; 借りる》, вставать/встать 《起きる》, встречать/встретить 《出会う》, входить/войти 《入る》, выходить/выйти 《出る》, возвращаться/вернуться 《帰る》, вспоминать/вспомнить 《思い出す》, выполнять/выполнить 《実行する》, давать/дать 《与える》, догонять/догнать 《追いつく》, забывать/забыть 《忘れる》, закрывать/закрывать 《閉じる》, запира́ть/запереть 《ロックする》, засыпать/заснуть 《眠り込む》, исчезать/исчезнуть 《消える》, класть/положить 《(横に)置く》, кончать/кончить 《終える》, ложиться/лечь 《横たわる》, ломать/сломать 《壊す》, надевать/надеть 《着る》, опаздывать/опоздать 《遅れる》, останавливаться/остановиться 《止まる》, открывать/открыть 《開ける》, поднимать/поднять 《持ち上げる》, покупать/купить 《買う》, получать/получить 《受け取る》, посылать/послать 《送る》, привыкать/привыкнуть 《慣れる》, придумывать/придумать 《思いつく》, продавать/продать 《売る》, происходить/произо́йти 《起こる》, просыпаться/проснуться 《目覚める》, проходить/пройти 《通る過ぎる》, решать/решить 《解く, 解決する》, садиться/сесть 《坐る》, славать/сдать 《(試験を)受ける, 受かる》, снимать/снять 《取りはずす》, спасать/спасти 《助ける》, ставить/поставить 《(立てて)置く》, тонуть/утонуть (потонуть) 《沈む》, убеждать/убедить 《納得させる》, убивать/убить 《殺す》, уговаривать/уговорить 《説得する》, уезжать/уехать 《(乗

り物で)去る》, умирать/умереть《死ぬ》等である。

この型の動詞は、ある質的に異なる臨界点としての限界目標に対して、完了体は限界到達を示し、不完了体は限界到達という特徴に関して無標項であり、段階的到達を示さない動詞グループである。ここでの無標項とは、不完了体の体の意味としての反復や一般的事実の意味、および歴史的現在の用法を除けば、不完了体は動作実現への段階的な到達を示すことなく、限界目標への非到達、目標へ向けての「試み・傾向」を意味し、動作実現へ向けてのプロセスを表す。すなわち、MazonやМасловらによって述べられる、不完了体の動作実現へ向けての「試み・傾向」と完了体の動作の「実現・成功」との対立を示す動詞型である。従って、この動詞型は以下の構文を取ることができる: я долго ловилⁱ его... и наконец пойтал^p《私は彼を長いこと捕まえようとしていて、ついに捕まえた》, он умиралⁱ... и наконец он умер^p《彼は死にそうだったが、ついに死んだ》, он тонулⁱ... и наконец утонул^p《彼は沈みかけていたが、とうとう沈んだ》, я добонялⁱ его... и наконец догнал^p《私は彼に追いつこうとして、ついに追いついた》, я опаздывалⁱ на поезд... и наконец опоздал^p《私は列車に乗り遅れそうだったが、結局乗り遅れてしまった》, я долго решалⁱ задачу... и наконец решил^p《私は長い間問題を解いていて、とうとう解いてしまった》等。例えば:

(21) Они не поймали^p акулу, хотя долго ловилиⁱ ее.

《彼らは長い間鯨を捕まえようとしていたけれど、捕まえられなかった》

(22) Левин ... придумывалⁱ и не мог придумать^p что сказать.

(Толстой: Анна Каренина)¹⁵⁾

《レーヴィンは何を言うべきか考えだそうとしていたが、考えつかなかった。》

(23) Пока он [Маяковский] существовал творчески, я четыре года привыкалⁱ к нему и не мог привыкнуть^p. (Пастернак: Охранная грамота)¹⁵⁾

《マヤコフスキーが芸術家として存在しているあいだ、私は四年間彼に馴染もうとしたが、馴染むことができなかった。》

上の21), 22), 23)の例文は、動作の「試み・傾向」対「実現・成功」を表す不完了体と完了体の対立である。一方、序論で挙げた例文1)は反復、習慣を、2)は一般的事実を表す不完了体であり、その場合の文脈における ловил(a)は「魚(肉片)を捕ろうとしていた(が捕れなかった)」という意味ではなくて、実際に「魚(肉片)を捕った」という意味である。しかし不完了体は、前に述べたように限界到達という特徴に関して無標項として説明できる。それ故、不完了体の無標項としての用法は、他の文脈において限界到達に関して明確なことがわからない場合、反復的動作を表す文において不完了体は曖昧さを許容する。次の文を比較せよ: Почти каждую ночь ловилиⁱ вора около фермы. (Forsyth) a)《ほとんど毎晩、工場のそばで泥棒を捕まえた

(限界到達)》, b) 《ほとんど毎晩, 工場のそばで泥棒を捕まえようとしていた(限界非到達)》。

またこの型の動詞の多くは, *приходить/прийти* 型の動詞と同じく, 不完了体の過去形は孤立した表現において発話時点とは切り離された動作を意味し('two-way' action), 完了体は発話時点において動作の結果が残存していることを表す。すなわち不完了体の過去形の動詞そのものは逆の動作を含意している: *открывал*ⁱ 《開けていた》=*открыл*^p 《開けた》+*закрыл*^p 《閉めた》, *вставал*ⁱ 《起きていた》=*встал*^p 《起きた》+*лег*^p 《寝た》, *просыпался*ⁱ 《目が覚めていた》=*проснулся*^p 《目覚めた》+*заснул*^p 《寝入った》, *снимал*ⁱ 《脱いでいた; 外していた》=*снял*^p 《脱いだ; 外した》+*надел*^p 《着た》(*повесил*^p 《掛けた》)等。例えば:

(24-a) Окно закрыто, но в комнате холодно. Вероятно, кто-то *открывал*ⁱ окно. (Василенко)

《窓は閉まっているが, 部屋の中は寒い。恐らく誰かが窓を開けていたのだろう》

b) Окно открыто. Кто *открыл*^p его? (ibid.)

《窓が開いている。誰が開けたのだろうか》

(25-a) Картина висит не на том месте, что раньше. Вы не знаете, зачем ее *снимали*ⁱ? (ibid.)

《絵は前とは違う場所に掛かっている。何のために外し変えたのか御存じですか》

b) На стене нет картины, которая всегда здесь висела. Кто ее *снял*^p? (ibid.)

《壁にはここにいつも掛かっている絵がない。誰が外したのだろうか》

(26-a) Я читал эту книгу, но у меня ее сейчас нет: я *брал*ⁱ ее у друга. (ibid.)

《私はこの本を読んだことがあるが, それを今持っていない。友達からそれを借りていたのだから(今は返してしまった)》

b) У меня есть эта книга. Но сейчас я не могу ее вам дать, потому что ее *взял*^p мой друг. (ibid.)

《私はこの本を持っているが, 今それをあなたに貸すわけにはいかない。友達が持っていてしまったから》

上の不完了体を用いた例文 a) は, いずれも過去に起こった動作が反対の動作によって発話時点では元の状態に戻っていることを示しているのに対して, 完了体を用いた例文 b) は, 発話時点においてまだ過去に起こった動作の結果が残っていることを示している。

3.3.4. В-2) читать/прочитать 型

この型に属する動詞は, *варить/сварить* 《煮る》, *гореть/сгореть* 《燃える》, *делать/сделать* 《作る》, *есть/съесть* 《食べる》, *жечь/сжечь* 《焼く》, *замерзать/замерзнуть* 《凍る》, *изучать/изучить* 《習得する》, *кормить/накормить* 《餌をやる, 食べさせる》, *красить/выкрасить* 《色を塗る》, *мыть/вымыть* 《洗う》, *отдыхать/отдохнуть* 《休息する》, *пахать/вспахать* 《耕す》, *писать/*

написать 《書く》, пить/выпить 《飲む》, подготавливать/подготовить 《準備する》, подходить/подойти 《近づく》, расписывать/расписать 《絵をかく》, собирать/собрать 《集める》, строить/построить 《建設する》, убирать/убрать 《片付ける》, учить/научить (выучить) 《教える》, (覚える)), учиться/научиться (выучиться) 《学ぶ》, читать/прочитать 《読む》 等である。

この動詞型は、B-1)型と同じく完了体によって限界到達を表し(он прочитал^P эту книгу 《彼はこの本を読んでしまった》), 不完了体は限界到達に関して無標である(он читалⁱ эту книгу 《彼はこの本を読んでいて/読んだ(読んでしまった)ことがある/(何回か)読んだ(読んでしまった)》)。しかし不完了体の体の意味としての反復や一般的事実の意味, および歴史的現在の用法を除くならば, 不完了体と完了体との対立関係は, B-1)型の「傾向・試み」対「実現・成功」といった「限界目標への非到達」対「限界目標への到達」という対立ではなくて, 「限界への段階的(部分的)到達」対「限界への全体的到達」という対立である。つまり, он долго строилⁱ дом... и наконец построил^P 《彼は家を長い間建てていて, とうとう建ててしまった》, он долго писалⁱ диссертацию... и наконец написал^P 《彼は長い間論文を書いていて, とうとう書き上げた》, он училⁱ стихотворение час... и наконец выучил^P 《彼は一時間詩を覚えていて, とうとう覚えてしまった》, он долго пилⁱ вино из бокала... и наконец выпил^P все 《彼はワイングラスでワインを長い間(ちびちび)飲んでいたが, とうとう全部飲んでしまった》等におけるように, 不完了体はその動作のプロセスにおいて部分的に到達された結果を示し, 完了体は全体的に到達された結果を示す。例えば:

(27) Эту ночь Саша помнил смутно. Лариска и Маруся пилиⁱ мало, а он, чтобы не отстать от Феди, выпил^P полстакана спирта, ... (Рыбаков: Дети Арбата)

《この夜のことをサーシャはおぼろげにしか覚えていなかった。ラリースカとマルーシャは少ししか飲まなかったが, 彼はフェージャに遅れをとるまいとして, コップに半分のアルコールを飲み干してしまった》

このчитать/прочитать 型の動詞の一部の完了体からは, 体のペアを成さない不完了体が二次的に派生される。例えば, читатьⁱ - прочитал^P - прочитыватьⁱ, жечьⁱ - сжечь^P - сжигатьⁱ, питьⁱ - выпить^P - выпиватьⁱ, естьⁱ - съесть^P - съедатьⁱ, учитьⁱ - выучить^P - выучиватьⁱ, 等。この二次的に形成された不完了体は, 各々の動作の限界到達が繰り返されることを意味する: Каждый день он прочитывалⁱ это письмо. 《毎日, 彼はこの手紙を(終わりまで)読んでいた》¹⁶⁾; Каждое утро он выпиваетⁱ стакан кофе. 《毎朝, 彼はコーヒーを一杯飲んでいる(飲み干している)》。

この B-2) 型動詞には, さらに бледнеть/побледнеть 《蒼ざめる》, слабеть/ослабеть 《弱くなる》, краснеть/покраснеть 《赤くなる》, хмелеть/охмелеть 《酔う》, стареть/постареть 《老ける》,

богатеть/разбогатеть《金持ちになる》等のタイプの動詞も含めることができる。この型の動詞は читать/прочитать 型の動詞とは、不完了体が段階的到達(он заметно стареетⁱ《彼は目に見えて年をとってきた》)を、完了体が動作の全体的到達(он сильно постарел^p《彼はひどく老け込んでしまった》)を表す所は共通するが、その動作の明確な限界の境界が存在しない所が異なっている。従って、この動詞に関して Маслов (1984: 61-62)が述べているように、この型の動詞に совсем, вконец, полностью, настолько, что... 等の定語を付け足してのみ「傾向」対「実現」の対立が可能である: заметно хмелелⁱ, но еще не охмелел^p полностью《かなり酔っていたが、まだすっかり酔ってはいなかった》。しかしそのような定語がない結合には、この対立は不可能である: *хмелелⁱ, но не охмелел^p。

3.3.5. В-3) видеть/увидеть 型

この型に属する動詞は、知覚動詞 (verba percipiendi) видеть/увидеть《見る、見える》, слышать/услышать《聞こえる》, 感覚に関する動詞 чувствовать/почувствовать《感じる》, ощущать/ощутить《感じる》, казаться/показаться《のように見える》, 発話行為に関する動詞 говорить/сказать《言う》, благодарить/поблагодарить《感謝する》, звать/позвать《呼ぶ》, лгать/солгать《嘘をつく》, называть/назвать《名付ける》, обещать/пообещать《約束する》, отвечать/ответить《答える》, просить/попросить《頼む》, прощаться/проститься《別れを告げる》, рассказывать/рассказать《物語る》, советовать/посоветовать《忠告する》, произносить/произнести《発音する》, сообщать/сообщить《知らせる》, спрашивать/спросить《尋ねる》, шутить/пошутить《冗談を言う》, 心的状態に関する動詞 волноваться/взволноваться《心配する》, жалеть/пожалеть《後悔する》, желать/пожелать《望む》, нравиться/понравиться《気に入る》, радоваться/обрадоваться《喜ぶ》, сердиться/рассердиться《腹を立てる》, смеяться/засмеяться《笑う》, стыдиться/постыдиться《恥じる》, улыбаться/улыбнуться《微笑む》, хотеть/захотеть《欲する》等の動詞である。

これらの動詞のあるもの、例えば、просить/попросить, желать/пожелать, нравиться/понравиться等は、体のペアを成さない動詞、すなわち「意味的ペア(семантическая пара)」（ラスードヴァ: 磯谷訳 39, 148-161)の動詞とされる。しかし本論では Маслов のアスペクトのペアの基準に基づきこれらの動詞を体のペアとして考えることにする。この動詞型は、Маслов (1984: 60)によれば、消極的に定義される動詞型である。すなわち「試み・傾向」対「成功・実現」型動詞とも、不完了形がプロセスを表すことができない動詞型とも異なるという消極的定義である。Маслов (1984: 62-63)はこの型の動詞を、「直接的な、絶え間のない効果」の動詞、つまり「行為の経過のたとえの一瞬を取っても効果のない、成果のないものとは思われないような行為を示す」動詞と意味的に特徴づけている。本論で用いているアスペクトの観点からすれば、この動詞型は、プロセスを表すことのできる他の ловить/поймать, читать/прочитать 型の動詞のよ

うに、完了体と不完了体の対立を限界動作の限界到達に関する有標対無標項の対立として捉えるのではなくて、完了体も不完了体も限界到達を示し、体の対立は別の基準すなわち語彙的、文法的、語用論的、文体的な基準に大きく作用される動詞グループであると考えられる。例えば、知覚動詞に関しては、B-1)型の *я ловилⁱ его... и наконец поймал^p* という「試み」対「成功」という意味のアスペクトの対立から、**я виделⁱ его... и наконец увидел^p* という対立を導き出すわけにはいかない。*видел/увидел*の対立は「持続性」対「瞬間性」の対立、あるいは完了体の起動相の意味での対立である: *Он все виделⁱ, а главного не увидел^p*. 《彼は全てを見たが、肝心なことは気付かなかった》; *Когда он увидел^p меня, он убежал*. 《彼は私を見つけると、走って行ってしまった》。従って、*видеть* や *слышать* といった動詞は、その体のどちらも限界到達を示すのであるから、「知覚の瞬間そのものが強調されないならば、普通、過去時制では不完了体が用いられる」(Forsyth: 93)ことになる。さらに発話行為を表す動詞もまた、知覚動詞と同様に「持続性」対「瞬間性」のアスペクト対立として捉えることができる: *много говорилⁱ, а по существу ничего не сказал^p* 《多くのことを言ったけれど、核心に触れることは何も言わなかった》(Маслов)。しかしこのような文脈や体の付加的意味(例えば、*он проводил^p ее, попрощался^p с ней и потом сказал^p мне...* 《彼は彼女を見送って、別れの挨拶をしてから、私に言った》)が現れない場合、特に物語における... *говорил/сказал он* 《...と彼は言った》のような場合には、完了体と不完了体は過去時制において意味の違いをもたない(Forsyth: 96-98)。例えば:

(28) Не ругай ее, - *говорилⁱ* Архитектор, - за двадцать лет она навидалась достаточно моих проскотов, они ей надоели. (Рыбаков: Дети Арбата)

《「彼女の悪口を言わないでくれ」と建築家は言った。「二十年の間に彼女はかなりの僕の設計図を見たので、うんざりなんだ」》

(29) - Мы голодные, - *сказал^p* Саша. - Варя, что будешь есть? (ibid.)

《「僕たちは腹ぺこなんだ」とサーシャは言った。「ワーリャ、何を食べるんだい」》

これと同じ様相を示すのは... *отвечал/ответил он* 《...と彼は答えた》の場合である。この用法の違いは Forsyth (99-100)によれば文体的な違いである。すなわちカラムジンやプーシキン、レールモントフなどの19世紀始めの作家たちは一貫して不完了体 *отвечать* を用い、その使用はツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイなどの19世紀の後半までの作家たちにはまだ優勢であったが、20世紀の作家(ゴリキー、パустフスキーら)は次第に完了体 *ответить* を用いるようになったという。

また心的状態および感覚を表す動詞の完了体は、基本的に起動的な意味をもつ: *обрадоваться* 《喜び始める》, *взволноваться* 《心配しだす》, *понравиться* 《気に入る》, *почувствовать* 《感じる》, 等。従って、不完了体と完了体の対立は「不定・持続的状态」対「一定時点における状態発生」

(ラースドヴァ: 磯谷訳 159)の対立, つまり上で述べた動詞と同じく「持続性」対「瞬間性」の対立である。例えば, ラースドヴァからの例:

(30) Сначала ваш знакомый мне не очень *нравился*ⁱ, но потом я изменил свое мнение.

(Рассудова)

私は最初あなたの知人があまり気に入っていませんでしたが, 後になって彼に対する考えを変えました。

(31) Ваш знакомый сначала мне не очень *понравился*^p, но потом я изменил свое мнение о нем.

(ibid.)

私は最初あなたの知人があまり気に入りませんでしたが, 後になって彼に対する考えを変えました。

この完了体の起動相の意味は, ペルフェクトの意味をもつことができる: Мне *понравилась*^p эта книга. 《私はこの本が気に入った(今気に入っている)》, cf. Мне *нравилась*ⁱ эта книга. 《私はこの本が気に入っていた》。

しかし意志的な知覚動詞 *смотреть/посмотреть* 《見る, 眺める》, *слушать/послушать* 《聴く》, *нюхать/понюхать* 《嗅ぐ》等は, その体の対立として「持続性」対「瞬間性」の意味の対立を表すことができるが, *видеть/увидеть* 型の動詞と異なり, *ловить/поймать* 型の動詞のように「試み」対「成功」の意味的対立を示すことができる(Маслов, 1984: 63): *смотрел*ⁱ, но не *увидел*^p / *видал*ⁱ 《見ようとしたが, 見えなかった》, *слушал*ⁱ, но не *услышал*^p / *слышал*ⁱ 《聴こうとしたが, 聞こえなかった》。しかしこれはアスペクトによる対立ではなくて, 語彙的な対立である。それ故, この場合には *видеть* と *увидеть* 両方の体が可能である。

4. 結 語

現代ロシア語動詞の語彙の意味とアスペクトの関係を考察するために, 上で述べたように動詞を 1) *imperfectiva tantum*, 2) *perfectiva tantum*, 3) 相関する体のペアを成す動詞に分類した。*imperfectiva tantum* は, 静的動詞と非限界動作を示す動詞であり, これらの動詞によって示される状態あるいは動作に共通な特徴は, 時間的に無限の展望をもち, 中断や質的な変化をこうむることがなく, 全ての局面において同じであることである。*perfectiva tantum* は, アスペクト (*вид*) のカテゴリーではなく, 動作様態 (*Aktionsart, способ действия*) のカテゴリーであり, これらの動詞によって示される意味の特徴は, プロセスを表すことが出来ず, 瞬間相, 終止相, 起動相等の意味, および継続時間のひとまとまりの姿としての把握の意味である。相関する体のペアをなす動詞については, 不完了体がプロセスを表すことが出来るか出来ないかによって二つに分類した。A) プロセスを表すことが出来ない動詞: A-1) *приходить/прийти* 型

は、どちらの体も限界到達動作を示し、不完了体は反復、習慣、予定、一般的事実等を表す。またこの型の動詞の多くは、不完了体が‘two-way’ actionを、完了体がペルフェクト的意味を表す。A-2) качать/качнуть 型は、量的アスペクト性に関わり、その多くの動詞の不完了体は multiphasal action を表し、完了体は一回動作(semelfactive action)の限界到達を表す。B) プロセスを表すことが出来る動詞: B-1) ловить/поймать 型は、完了体が限界到達を示し、不完了体は限界到達という特徴に関しては無標であり、そのプロセスにおいて段階的到達を示さない。その不完了体と完了体の基本的な意味の対立は、「試み・傾向」対「成功・実現」である。またこの型の動詞の多くは、‘two-way’ actionとペルフェクト的意味を持つ。B-2) читать/прочитать 型は、完了体が限界到達を示し、不完了体は限界到達という特徴に関しては無標であり、そのプロセスにおいて段階的到達を示す。B-3) видеть/увидеть 型は、両方の体が限界到達を示し、体の対立はこの特徴以外の要因による。この型の動詞の不完了体と完了体の基本的な意味の対立は、「継続性」対「瞬間性」の意味である。しかしこの型の動詞は、一般的に、特別な文脈や体の付加的意味が現れない場合には、体の対立は中和される。

註

- 1) ロシア語の完了体と不完了体の対立をもつ動詞の体の意味を、Рассудова (磯谷訳: 31-36)は三つの側面から把握しようとする。まず「動作の全一的把握を指示する完了体とそうした指示を含まない不完了体という対立」という「体の一般的意味 общевидовые значения」、そしてこの体の一般的意味が、具体的な発話状況において、それぞれの体に特有に出現する「個別の意味 частновидовые значения」、さらに動詞と法の枠内でこの個別の意味に伴う「付加的ニュアンス добавочные оттенки」である。この内の体の個別の意味を Маслов による分類に基づき、Рассудова は次のように分類している: 不完了体は、「1)動作の過程の意味 значение процесса действия: Молодая женщина сидела у окна вагона и читала. 《若い婦人が列車の窓側に坐って読書していた》, 2) 一般的事実の意味 общефактическое значение: Вы читали эту повесть? В каком журнале вы ее читали? 《あなたはこの物語を読んだことがありますか? どの雑誌でそれをお読みになりましたか?》, 3) 反復性の意味 значение повторяемости: Иногда я перечитывал писателей, которых особенно любил. 《時折私は大好きな作家の作品を読み返すのであった》」。完了体は、「1) 具体的事実の意味 конкретнофактическое значение: Он повторил мне свой вопрос. 《彼は私に自分の質問を繰り返した》, 2) 一括化の意味 суммарное значение: Он несколько раз повторил свой вопрос. 《彼は二、三度続けざまに自分の質問を繰り返した》, 3) 例示の意味 наглядно – примерное значение: Если вы не поймете мое объяснение, я всегда могу повторить его вам. Я всегда повторяю его вам. 《もし私の説明がわかりにならなければ、私はいつでもあなたに繰り返してあげても構いません。私はいつでもそれを繰り返してあげましょう》」。付加的ニュアンスとして、磯谷(Рассудова: 2) は次のニュアンスが出現するという: 「例えば完了体では、結果達成、結果残存、結果の評価、期待された動作、

可能・不可能, 危惧, あるいは潜在的可能性(不規則的反復の可能性)を踏まえた一般化, 不完了体では, 上記の動作の名指し, 動作事実の有無の確認, 経験, 回想的過去, 結果の消滅, 未然の動作, 結果達成を希望しないこと, 禁止, 不必要, 否定的意図, 着手, 様態, 努力, 所要時間, 予定, 同時性, 規則的(頻発的)反復の可能性を踏まえた一般化といった意味ニュアンスが出現する」。

- 2) ロシア文字の右上の記号 '^{h} と '^{i} は, 問題となるそれぞれ動詞の「完了体」と「不完了体」を表す。
- 3) 文頭のアスタリスクは, その文が非文法的であることを示す。
- 4) *видеть/увидеть* のように動詞の体のペアを表す場合は, 不完了体/完了体の順序で表す。
- 5) ロシア語の体への欠如的対立 (privative opposition) の概念の応用は, Jakobson により提案された。それによれば, 「音韻的相関の本質的特徴のひとつは, 相関ペアの双方の項は互いに同等のものではない, すなわち, 一方の項が問題とされる特徴を有しているのに対して, もう一方の項はそれを有していない, ということにあって, その場合前者は有標, 後者は無標と名付けられる。この規定は形態的相関の特徴記述の基礎としてもそのまま適用できるものである。... 2つの互いに対立する形態的カテゴリーを考察するにあたって研究者はしばしば次のような前提から出発がちである。すなわち, その2つのカテゴリーは同等なものであって, それら各々がそれぞれ固有の積極的意味を有する。つまり, カテゴリーIはAを, カテゴリーIIはBをそれぞれ表示する, あるいは少なくともIはAを表示し, IIはAの不在, 否定を表示する, というものである。しかし実際には相関カテゴリー間での一般的意味の割り当てのやり方はそうではない。つまり, カテゴリーIがAの存在を表明するとすれば, カテゴリーIIはAの存在については何も表明しない, すなわち, Aが有るのかそれとも無いのかについては何も述べない。有標カテゴリーIに対する無標カテゴリーIIの一般的意味は, 「A信号化」の欠如ということのみにある。... (中略) ... 全体的なアスペクト相関: 「完了動詞」(有標) ~ 「不完了動詞」(無標)。不完了動詞の無標性は明らかに一般的に認められている。Шахматовによれば, 「不完了アスペクトは通常的な, 資格づけられていない動作を表示する」。一方, Востоковは既に次のように述べている: 「完了アスペクトは, 既に開始されている, あるいは終っているという意味表示を伴って動作を示す」のに対して, 不完了アスペクトは「その始まりおよび終りの表示なしで動作を示す」。これらをより正確に規定するならば, 不完了動詞との対立における完了動詞は動作の絶対的限界を告示するものであるということができよう」(米重訳: 55-69)。本稿で用いるある特徴Aに関する有標 (marked) と無標 (unmarked) の概念は, 上の定義と同じである。
- 6) このような方法によるロシア語動詞の語彙的意味とアスペクトの関係の研究は, Маслов, 1948. *'Вид и лексическое значение глагола в современном русском литературном языке'* (Изв. АН СССР, отл. лит. и яз., 1948, т. 7, вып. 4, с. 303-316.) [1984: 48-65 に収録] によってなされた。さらに Forsyth (46-56) にもそのような分類がある。後者には具体的に多くの動詞が挙げてあり有益であるが, それは多く Маслов の分類に依っている。

- 7) Масловによれば、量的アスペクト性(quantitative aspectuality)とは、次の基準に従って動作あるいは状態を考えることである: 1) 動作あるいは状態が実行される回数, すなわち一回動作(semelfactive)か多数動作(repeated)か, さらにこの下位区分として, 限定的/非限定的, 規則的/非規則的, および永続的反復動作か; 2) 動作あるいは状態の継続期間, すなわち非限定的/限定的/瞬間的な継続期間か; 3) 動作あるいは状態の強さの程度, すなわち普通の程度か, 減少されているか, 増大しているか。
- 8) 'limited' (=предельный). 'limited/non-limited'の用語は, Garey, Allen, Comrie などによれば 'telic/atelic', Maslov らは 'terminative/aterminative', Johansonによれば 'desinent/non-desinent' と呼ばれる。Forsyth が Maslov の用語に反して何故 'limited/non-limited' の用語を使うかについては, Маслов (1985: 7) を参照されたい。なお Маслов (1962: 13-14) によれば, предельность/непредельность《限界性/非限界性》という範疇は, 動作様式(способ действия)と体(вид) の間のあたかも中間的位置を占める範疇である。
- 9) 質的アスペクト性の意味において非限界動作や静的動作を示す動詞であっても, 量的アスペクト性の意味においては限界(たとえ内的限界でなく, 外的限界であるとしても)を示すことができる: Каждый день он ходилⁱ в библиотеку. 《毎日彼は図書館にかよっていた》; Он прожил^p всю жизнь в Москве. 《彼はモスクワで一生暮らした》。
- 10) ロシア語にはさらに, 一つの語によって不完了体と完了体の両方の体を表すことのできる動詞(bi-aspectual verb)が若干存在する。例えば, женить(ся)《結婚させる(する)》, родить(ся)《生む(生まれる)》, казнить《処刑する》, ранить《傷つける》, 等。
- 11) Шахматов, А.А. (1941: 187-188) 'Очерк современного русского литературного языка.'
- 12) 体の一般的意味としての完了体の意味について, Рассудова (磯谷訳: 31-32) は次のように述べている: 「A.V. イサチェンコは(動作の全一的把握 целостное восприятие действия を表現するという)完了体の定義を具体的に説明しようとして次のように書いている。『完了体動詞によって表現される過程はすっかり話し手の視野のなかにある。完了体は過程をいわば外から見渡してしまうのである。』完了体と動作の全一的把握の関係は, 動作の経過, 展開, 発展を伝達する場合には完了体を用いることは絶対に不可能であるということに現れる。完了体動詞は動作の形成過程 становление を反映することはできず, 動作をいわば即座に『出来合いの形で』示すのである。そのため完了体の主要な特徴である動作の全一的把握は, 動作を経過において伝達する不完了体と比較したときにもっともはっきりと明らかになる。cf.: Рассказывалⁱ главврач ничего не преувеличивая, но именно то, что испытал каждый из здесь сидящих... (Ю. Герман) (医長は何も誇張せず, ここに坐っていた人たちの誰もが体験したことを話していた。)/И в ту ночь у Нарофоминска, помнишь, я рассказал^p тебе про Надю. И ты мне рассказал^p про Надю. И мы слово дали друг другу. Помнишь? (А. Арбузов) (そしてその夜, ナロフォミンスクの近くで僕は君にナージャのことについて話した, おぼえているかい? 君も僕にナージャのことについて話した。そしておたがいに

約束しあったのだ、おぼえているかい?)... こうしたわけで、体の対立というのは、動作の全一的把握を指示する完了体とそうした指示を含まない不完了体との対立なのである。」

13) Маслов (1962: 7-13) 参照。

14) при-タイプの動詞は、主に反復動作に使われる (Forsyth: 167)。

15) 例文 23), 23) は, Forsyth からの引用である。

16) 勿論、不完了体の基本形 читать によってもこれと同じ内容を表現することはできる: Каждый день он читал¹ это письмо. この場合にはその意味の広さのために、正確な表現が求められる場合には二次的に派生された形が用いられる。

参考文献

- Comrie, B. 1976. *Aspect. An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge.
- Денисов, П.Н., Морковкин, В.В. 1978. *Учебный словарь сочетаемости слов русского языка*. Москва.
- Forsyth, J.A. 1970. *A grammar of aspect. Usage and meaning in the Russian verb*. Cambridge.
- Jakobson, R. 1932. 'Zur Struktur des russischen Verbums' in *Charisteria G. Mathesio... oblata*. [Selected writings, II. pp. 3-15, 1971]
- (米重文樹訳「ロシア語動詞の構造について」大修館書店, 1986)
- Лопатин, В.В., Лопатина, Л.Е. 1990. *Малый толковый словарь русского языка*. Москва.
- Маслов, Ю.С. 1962. *Вопросы глагольного вида*. Москва.
1984. *Очерки по аспектологии*. Ленинград.
1985. *Contrastive studies in verbal aspect: in Russ., Engl., French and German*. Transl. and annot. by J. Forsyth. Heidelberg. [*Вопросы сопоставительной аспектологии*. Ленинград. 1978.]
- Mazon, A. 1978⁹. *Emplois des aspects du verbe russe*. Paris.
- Рассудова, О.П. 1968. *Употребление видов глагола в русском языке*. Москва.
- (磯谷孝訳編「ロシア語動詞 体の用法」吾妻書房, 1975.)
- Сазонова, И.К. 1989. *Русский глагол и его причастные формы: Толково-грамматический словарь*. Москва.
- Василенко, Е., Егорова, А., Лямм, Э. 1982. *Виды русского глагола*. Москва.